

見ざるものへ

末本文美士

「死んだらどうなるの」というのは、小さな子どもがしばしば発する疑問だが、それに本当に答えられる大人がどれだけいるだろうか。多分、「天国にいる」というのが、この頃ではいちばん多い答えだろうが、でも、本当にそう信じているのだろうか。

死後について語ることはうさん臭い。そんなことを話題とするだけで、おかしな奴と思われる。それだけに、「千の風になって」のヒットは驚きだった。「千の風になって」あの大きな空を／吹きわたっています」と、死者が自らの死後について明白に語っている。死後に関するタブーはやすやすと打ち破られた。それまで、死について語ること、何か後ろめたいような気がしていたのが、一気に吹き飛ばされてしまったようだ。

とはいえ、それでもやはり死後の問題がオープンに語られるというには至っていない。それは無理もないところがあり、誰も死後のことなど

本当に分かるわけがない。昔からいろいろな宗教がいろいろと死後の世界を説いているが、どれが正しいか決めようがない。確実な情報も誰ももたらしてくれないし、自分で死んでみるより仕方がない。合理主義者は、科学的に証明できないから、死後の世界などないというが、ないということもまた証明できない。

だから、ブツダは死後のこととは解答不能の問題だとして、それについて思い煩って

はならないと誠めた。哲学者のカントもまた、死後の靈魂の存在は純粋理性では答えの出ないことを明らかにした。それならば、死後のことなど考えなくて済むかということ、そうはいかない。仏教の中でも様々な死後の世界が語られるようになる。死後の問題は単に知的な関心の対象というだけではない。自分自身の死や身近な人の死はもちろん切実であるが、死に直面した人のケアに当たっても大事

な問題となる。昨春秋に行われた日本思想史学会では、「在宅ホスピスの現場における日本思想史研究の可能性」というパネルセッションが開かれた。過去の日本思想について論ずる学会で、このような今日的なトピックが取り上げられたのは初めてのことであり、死の問題に対して、日本の思想の伝統が改めて問い直されている状況が、参加者に強い衝撃を与えた。

その中で、実際に在宅ホスピスの活動を展開している岡部健氏は、終末期になるにつれて、日本人は伝統的な死生観に回帰し、「この世」との連続上に「あの世」が捉えられ、「お迎え」を待つようになることが多いと指摘した。

それに対して、現在の医療は科学的な世界観に立つため、死後の問題に答えようがなく、適切なケアの体制が取れないので、改めて過去の思想を振り返り、思想史の知恵を借りることが必要になるといっているのである。

今思想史学にはまだ、それに対する十分な答えを与えただけの用意はない。しかし、これまでのホスピスなどの活動は多くキリスト教の立場からなされ、その影響下に仏教側ではじめられたビハラー運動は、必ずしも広く展開しているとは言いがたい。それを考えると、欧米モデルの死生観を衣替えするだけでは不十分で、もっとしっかりと日本人の死生観に立脚した道が確立される必要がある。

死後の世界について怪しげな説を振り回すのではなく、節度をもった議論をオープンにできるような、そんな雰囲気のできればよいと思う。

(すえき・ふみひこ 仏教学者)

死後をオープンに語る



「あくがれ出づる 15」 写真・大友真志

*今回は4月19日に掲載します